日常が展示になる道

1 設計背景

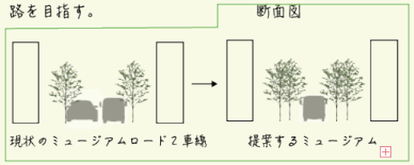
かつて車が主役だった都市の通りは、効率性を優先するあまり、人の滞在や交流を生みにくい環境となっている。
本計画では「**ほこみち制度**」を基盤に、神戸ミュージアムロードを対象として、歩行者中心の通りのあり方を再考する。
道をあえて曲げ、車の速度を抑えることで、立ち止まりたくなるリズムを生み、建物とほこみちが一体となった"人が過ごす道"を描く。
この場所が、地域と学生が関わりながら新しい都市の風景を育てていくための舞台となることを目指す。

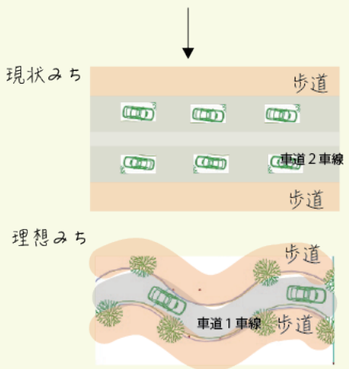
2 対象敷地

計画地は神戸市のミュージアムロード沿い、高架下からHAT神戸方面へ続く通りである。
周囲には大学、美術館、住宅地が混在し、通勤・通学・観光など多様な人が行き交うが、車の通過が多く人の滞在は少ない。
このエリアを、歩行者と小型モビリティが共存する"滞在型の道"として再構成する。

3 コンセプト

一方通行とすることで道に"**ゆとり**"を生み、歩行者が主役の通りへ。
木陰と活動がにじむほこみちとして、地域交流や学校の部活動が行える施設が共存する、**にぎわい**のある街路を目指す。



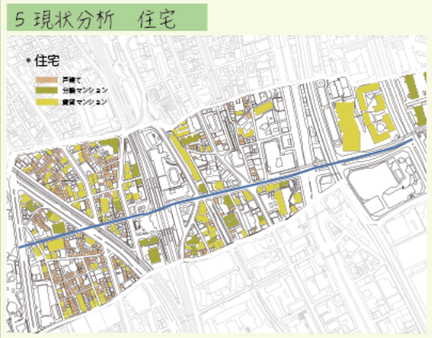


理想とするミュージアムロード

・車の者や排気ガスを抑え、誰もが安心して暮らせる道。
・出勤時や登下校が街に置いてあるアート作品にふれることで、
新しい発見をくれる。
・"ほこみち制度"を応用し、新しい街を作る。
・ここミュージアムロードは若手が活躍し、世界へ羽ばたいていく
という思いがあり、たくさんの人にふれてもらいたい。
・ここで展示する作品は、部活やイベント等で作ったものも展示し、街全体を街の人達で暮らし安く、楽しく作って欲しい

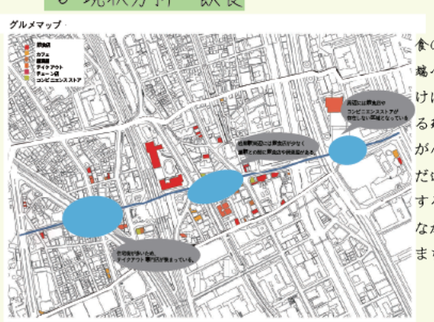
・さまざまな変化、
"完成しないミュージアムロード"と言う形ができる。

5 現状分析　住宅



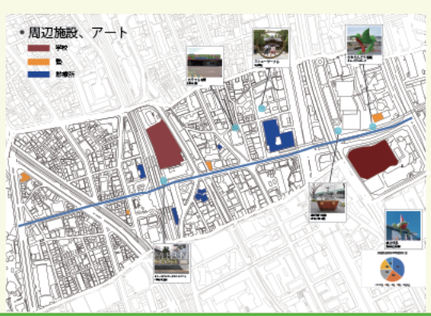
この街には多様な住宅が並び、日常の生活が濃く積み重なっている。しかし住宅は道路に沿って帯状に広がり、人々の移動は常に速さを伴う。生活はあるのに、立ち止まり語らう余地が少ない。住宅密度の高さは活気を生むはずだが、今の街はまだ"流れてしまう日常"のままである。

6 現状分析　飲食



食のにぎわいは中心に寄り、端へ行くほど薄れていく。歩けば店はあるのに、立ち止まる理由は少ない。ここでは食が人を留められず、まちはただ通り過ぎられていく。点在する飲食は生活の匂いを持ちながらも、まだ"途中のあるまち"のままである。

7 現状分析アート



まちはアートを持っている。
しかし、それらは繋がらず、ただそこに置かれているだけだ。
人は止まらず、眺めず、通り過ぎる。
本当は豊かなのに、その豊かさはまだ"迷いまち"の中に埋もれている。
だからは、ここに展示が滲み出る道を描こうと思った。

8 まとめ

本エリアは、沿道に中層～高層の住宅が多く立地し、日常的に利用する住民が多い人口密度の高い地域である。また、美術館・教育施設・動物園・公園などの文化・観光拠点が点在しており、灘駅を中心に歩いて回遊しやすい環境が形成されている。さらに、道路沿いには飲食店やカフェが連続して立地し、地域のにぎわいを生むポテンシャルが高い。これらの「住宅 x 文化施設 x 飲食」が重なる特性から、歩行者中心の快適な空間づくりや回遊性を高める動線計画、文化・アートの発信、店舗のにじみ出しを促す"ほこみち"の導入が非常に相性の良いエリアであるといえる。

ほこみち制度

ほこみちとは

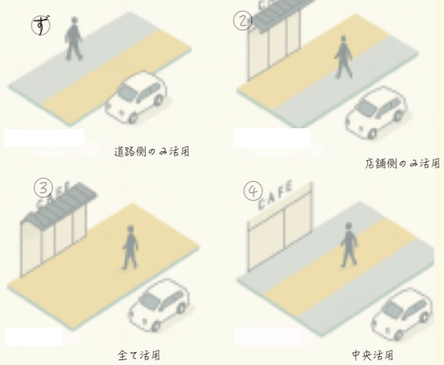
ほこみちは「歩行者利便増進道路」の愛称だ。
道路を歩行者にとって、もっと安心して歩ける、楽しく過ごせる「みち」。

どんな制度？

歩行者利便増進道路（通称：ほこみち）制度は、道路空間をにぎわいのある滞在空間として柔軟に活用できるようにする新しい制度。

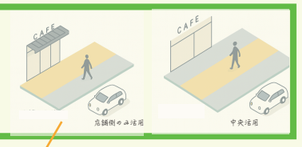
<主な特徴>
・道路管理者が歩道の一部を「歩行者の利便を高める空間」として位置づけ、カフェやベンチの設置が可能に。
・特例区域を定めることで、道路占用許可が柔軟に認められる。
・公募により最大 20 年間の占用が可能
・この制度により、広い歩道にカフェやベンチなどを置いて、人が集まりやすい魅力的な空間づくりが実現しやすくなる。
※道路占用：道路に工作物や設備を設置して継続利用すること。

ほこみちのイメージ

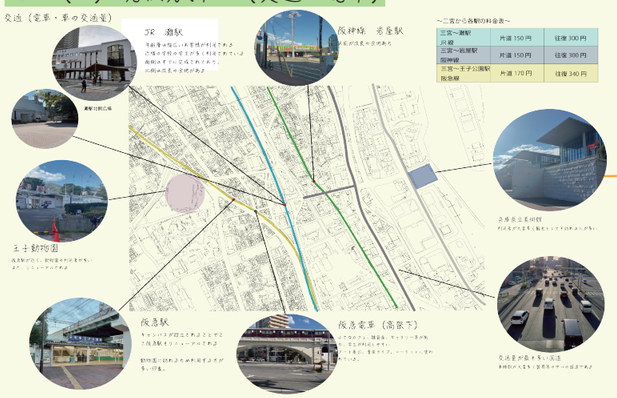


ミュージアムロードのほこみち制度の目的

本エリアは、主要道路が南北・東西に交通量が多く、歩行者よりも車の移動が優先されてきた。その結果、道に「滞在」や「寄り道」の余白が少なく、街路空間は通過のためだけに使われている。
一方で、周囲には美術館・カフェ・公園など、ゆっくり歩くことで価値が高まる文化資源が点在している。



2 （1）現状分析 （交通・電車）

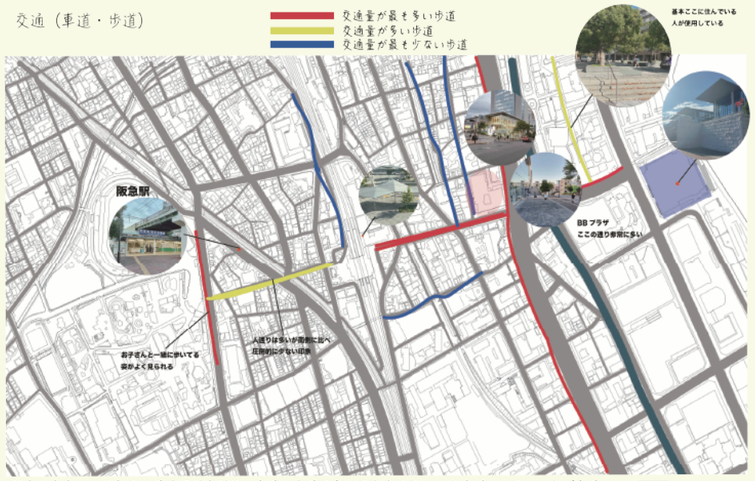


～三宮から各駅の料金表～

三宮～灘駅	片道 150 円	往復 300 円
JR線		
三宮～岩屋駅	片道 150 円	往復 300 円
阪神線		
三宮～王子公園駅	片道 170 円	往復 340 円
阪急線		

2 （2）現状分析 （交通・バス）

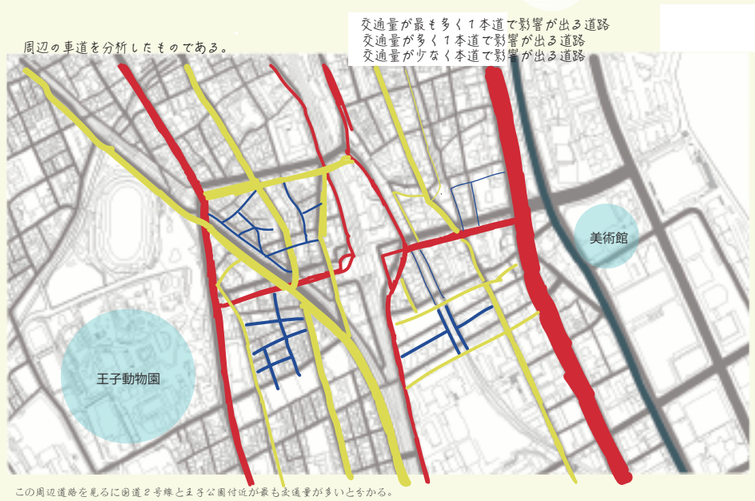
2 （3）現状分析 （道路・歩道）



阪急駅を中心に放射状へ道路網が広がり、主要な車道は南北軸と東西軸へ強く伸びている。一方で歩道の連続性は弱く、特に駅東側では動線が途切れやすいことが確認できる。人の滞留が生まれる区間と車の流れが優先される区間が明確に分離しており、歩行者が回遊しにくい構造となっている。

2 （4） 現状ミュージアムロード道路

今どうなってる？？

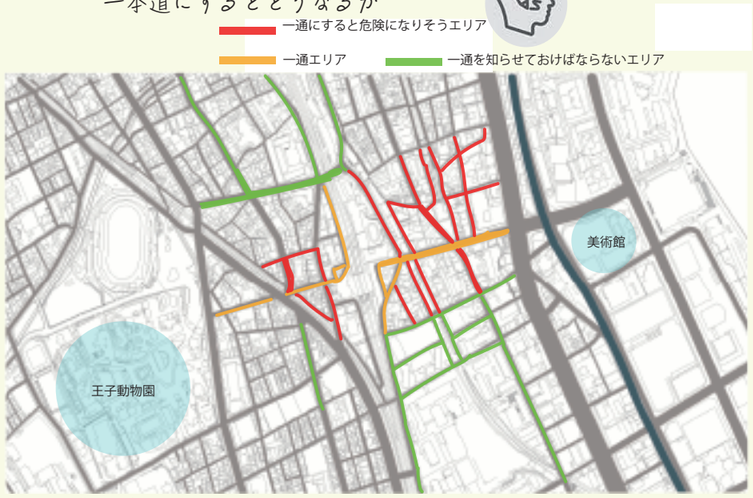


この周辺道路を見るに国道２号線と王子公園付近が最も交通量が多いと分かる。
加えて、どちらも灘駅に向かう通りも多くなっている。

2 （4） ミュージアムロード道路整備

今後どのように変化
20年後の道していく？？

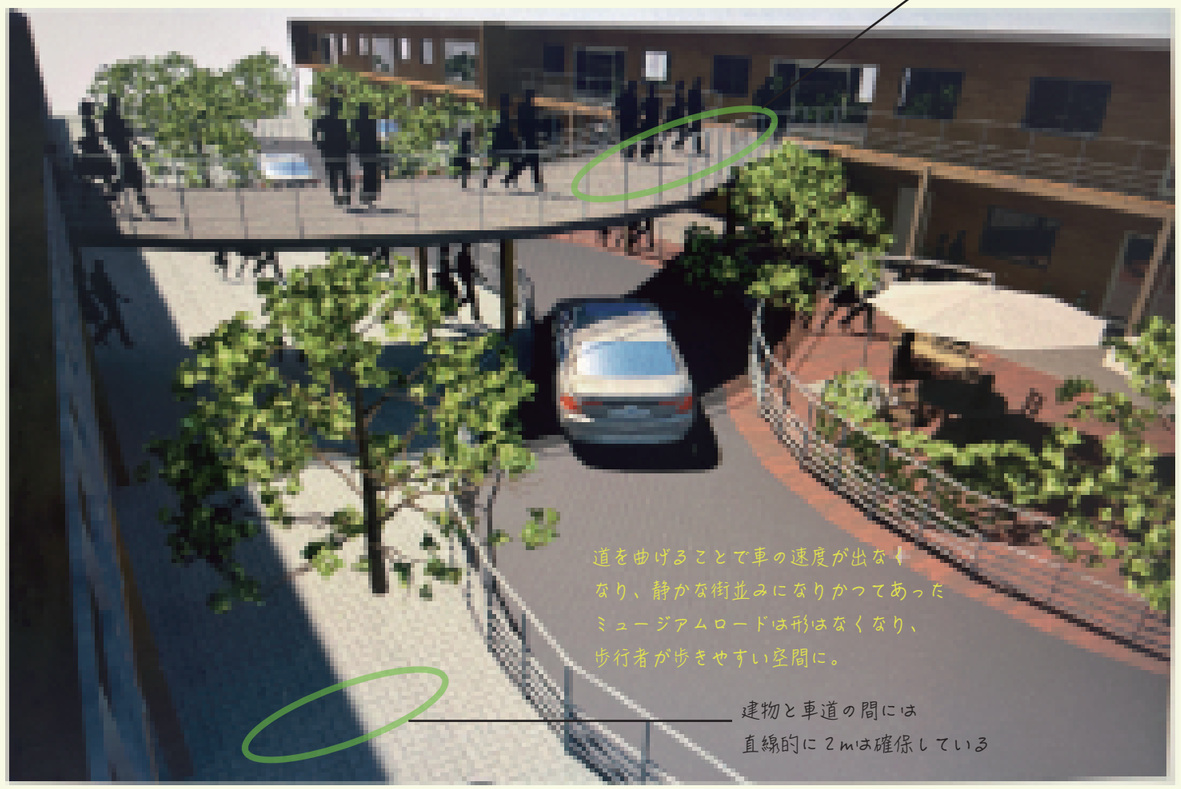
一本道にするとどうなるか



このように道を一つ変えることで周囲は変化する

4 分析から導く"速度を失ったみち

2階からも眺めることができる
高架下に作品がある



3 （1） 道を曲げるミュージアムロード

建物内で過ごす空間
人の動きが見える空間
滞留空間
滞留空間
人の動きが見える空間
建物内で過ごす空間

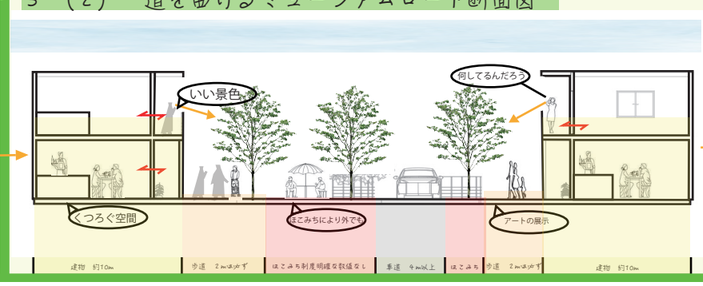
車の動きが分かる空間

４つの空間構成イメージ図

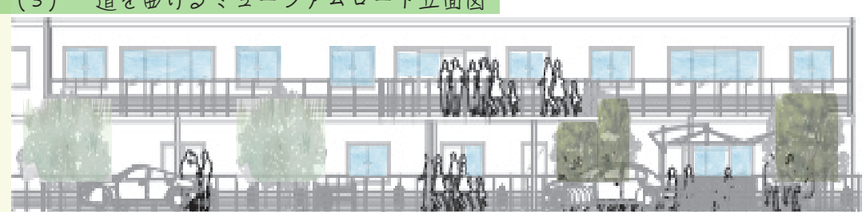
曲線が分ける、4つのまちの居場所

道を曲げることで、人の流れにゆらぎが生まれる。
直線的にはない滞留・観察・通過の4つの空間が段階的に立ち上がり、
歩行と車の動きが重なり合うミュージアムロードが形成される

3 （2） 道を曲げるミュージアムロード断面図



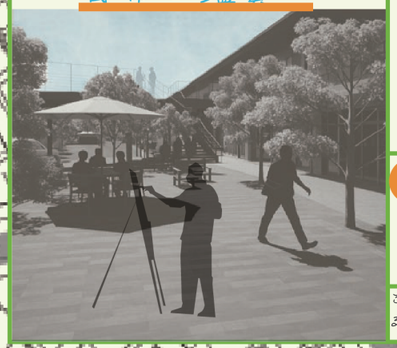
3 （3） 道を曲げるミュージアムロード立面図



歩行者を優先させることで、立ち止まり、眺め、振り返る余白が生まれるがある。
アート・地域の情報・人の活動と自然に交わり、
道そのものが多様な発見の場へと変化する。歩くことが目的ではなく、歩くからこそ見つかる価値がこの場所の魅力である

20年後のミュージアムロード

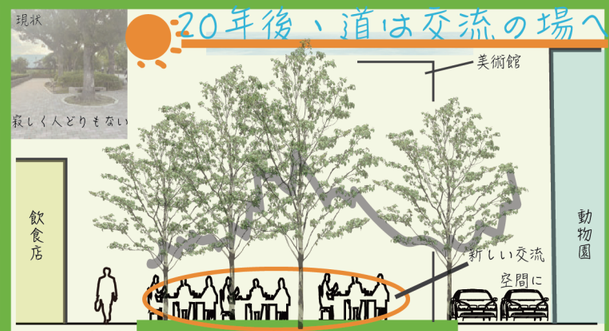
日常は鑑賞へ



木漏れ日の下、ただ歩くことが鑑賞へと変わる。
人の動き、影の揺れ、風の温度までも展示となり、
見る側と見られる側が溶け合うような路上のミュージアムが生まれる。

この図のようにただ通勤・通学しているだけでも特別な空間・特別な絵に

20年後、道は交流の場へ



現状ただの通り道でしか無いが20年後には新しく大学が建設されるという。
ただの通り道ここがキーワードだと思う。新しく建設される大学の通学路。ここに集約されると感じる。とても恵まれれいる場所だと感じ、目の前には動物園奥の方には美術館とまさにアートにうってつけの場所である。将来的ここでのスケッチなどの課題もあると思う。現状は地面がコンクリートで寝転がることもできない。芝生にすることで集まりやすい空間になると思う。

交差点がつなぐ透明なまち

交差点に面した建物はガラス張りとし、内部の活動がまちへ滲み出す。
向かい合う視線が互いの滞留を誘発し、歩行はただの移動ではなく交流へ変換される。
ここに生まれる時間が、まちの展示となる

とくべつ授業は、従来学校内で行われていた部活動を地域へ開き、スポーツ・文化活動を市や民間施設で受け入れていく取り組み。
教員の負担軽減と、多様な活動機会の確保を目的とし、
主役は街全体を舞台として放課後を過ごす未来を描いている。

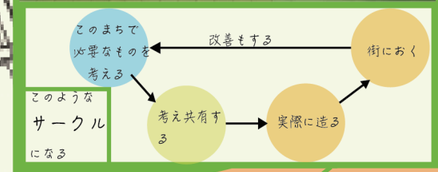
校舎をイメージし、新しい活動へ

学校の部活動が地域へ移行する「とくべつ授業」を受け止める拠点として、交差点に面する建物をガラス張り・音・動き・練習の気配が街路に溶け出し、放課後の活動そのものが風景の展示となる。交差点の特徴である4方向に建てるてガラス張りにする事で学校のような場所に。

ただ見るが変わる

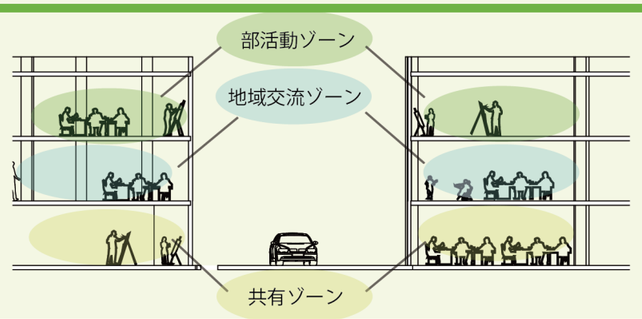
外で造るアート

この道では、歩くことが鑑賞になる。
通りすぎるだけだった風景は、誰かの視線によって展示へと変わる。
ベンチに残る色、落ち葉の跡、描きかけのスケッチ——
小さな痕跡がこのまちの記憶となり、時間を積み重ねていく。
都市は作品になり、人の営みは展示になる。
日々の暮らしそのものが、この街の物語を紡ぎ続ける。



このような サークル になる

ガラス越しの学びが街を動かす



常識が変わる

部活がなくなる → 交流が減る → 新しい場所が必要

20年後には部活がなくなる。運動部はグラウンドなどを使用できるが文化部はそうではない。
ここでは、文化部を中心に考えていく。

学校の問題

近年、学校現場では教員の長時間労働が常態化し、特に放課後の部活動指導が大きな負担となっていた。土日を含む練習・大会引率まで担う状況は、教員の働き方改革の観点から持続可能ではなく、部活動のあり方そのものが問われはじめた。また、少子化により学校ごとの部員数が減少し、従来の学校単位での部活動運営が難しくなる地域が増えたことも課題として表面化している。

ほこみちとつながる

部活動ゾーンでは、音や会話、動きといった活動の気配が外へとにじみ出し、まるで校舎の内側だけに閉じない学びの姿を生む。交流ゾーンは地域の人が立ち止まり、偶然に視線が交わり、声が届き、関係が芽生える余白として機能する。そして展示ゾーンでは、作品だけでなく制作の過程そのものが街に露出し、プロセスが風景となって残る。活動が見えることは、まちと学校の境界をやわらかく溶かし、互いの存在を日常的に意識し合う都市の学びを育てていく。

ほこみちにつながる仕組み

部活動
音・気配が外へ漏れる

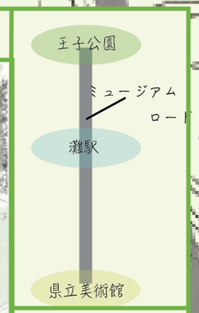
習い事
立ち止まる余白が生まれる

展示スペース
プロセスが街の景色になる

歩行者は建物内部の活動を外側から覗き込み、制作の空気や作品の熱量に触れることができる。アートが隔てられず街へ滲み出すことで、通りゆく人の時間さえ展示体験となり、ゆっくりと浸める風景が生まれる。

記憶が積もる駅前

駅前の広場にはイベントと人の流れが生まれる。
歩行の速度が緩むことで会話が滞留し、影と音が展示の一部になる。
日常の集まりが風景として記憶され、まちがゆっくり育つ



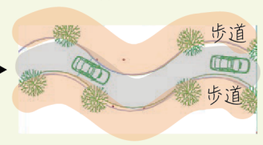
灘駅前広場はミュージアムロードの中間に位置し、現在最も利用者数の多い駅であり今後改装もあるので魅了的に

みんなで造る ミュージアムロードはの仕組み

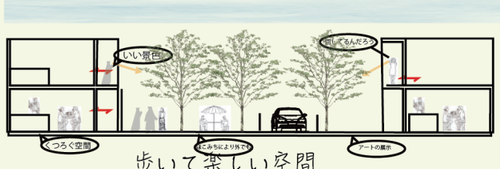
1 道を曲げる

現状みち

理想みち

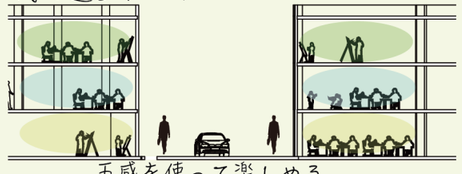


2 外で造るアート



歩いて楽しい空間

3 内で造るアート



五感を使って楽しめる

ここは地域の人達あるいは観光客と造る街
足りないものを考え作り、共有する。
その結果自然にも優しい環境が生まれるかも知れない

完成しない ミュージアムロード